

## Sibelius 2 (7)

新年おめでとうございます。最近 Sibelius2 のバージョンが 3.0 になったということがよく言われます。確かに昨年 4 月に発表され実際には 7 月から発売されたわけですから、それはちょっと早すぎるのではというわけです。この件はご心配には及びません。英語版とドイツ語版にこのバージョン 3.0 が出たことは確かです。日本語版は 2.6.0 ですから確かに数字だけを見れば日本語版が古いような気がします。

実は Sibelius2 のバージョンに関しては 語版ごとにグルーピングされており、日本語版は歌詞が 2 バイトコードであったり英語版とはかなりの部分が違うので英語版と同じ成長環境にあるのではないのです。日本語版の 2.6.0 の方が英語版の 3.0 よりそのような機能においてむしろ新しいのです。ですからご安心ください。日本語版の 3.0 はまだ出ませんし、当面遅れている必要もありません。

さて、Sibelius2 のユーザーは私の周りでもかなり増えてきました。その彼らが複数のコンピュータを持っていて、そのコンピュータ毎に個別の Sibelius2 をインストールしなければならないのが経済的につらいと言います。私も自宅と大学の研究室にそれぞれ Windows 機と Macintosh 機を複数台持っていますのでそう思っていました。Finale の場合一枚のディスクから複数のコンピュータにインストールしてもキーディスクさえ自分が持っていればよかったのですが、たまにキーディスクを入れなさいという指示が出たときに手元になくて困ることがあった程度です。

Sibelius2 では二つの状態があります。ひとつは「ファイル保存権」のあるメインユーザーの状態と「ファイル保存権」以外の機能だけが使えるヌケガラ状態です。このヌケガラ状態でもファイルのセーブ以外はすべてできますから、何台でもこのヌケガラを作っておくことは可能です。印刷と再生だけでしたらこの状態でも良いのですが、メインユーザーの権利をこのヌケガラに移動することで、使用者が同時に複数の Sibelius2 を使用しないという前提で、メインユーザーの「権利」だけを移動させるバーチャルな「キーディスク」の機能がありますので、それを使えば何台のコンピュータにも Sibelius2 をインストールして使用することができます。この「入魂」「脱魂」の方法は簡単で、それぞれのコンピュータの MAC アドレス(コンピュータごとの世界でひとつのユニークなアドレス)から生成される C で始まる 16 桁のコードが Sibelius2 をインストールしたすべての Sibelius2 に自動的にできますので、【ファイル】 【登録/保存機能移転】 【保存機能の転出】の順に選んで、魂の移動先のこのコードを、指示されたコラムに入力します。する

と、今度は T で始まる 16 桁の転出コードが出ますので、それを移転先のコンピュータの Sibelius2 の画面の同じ【ファイル】 【登録/保存機能移転】 【保存機能の転入】の順に開いたコラムにその T で始まるコードを打ち込みます。これで、「入魂」成立です。もとのコンピュータはヌケガラになり、新しいコンピュータがメインになるわけです。Win 間だけではなく Win Mac でも可能です。最初は面倒だったこの作業は至って簡単で、気軽にコンピュータ間を移動して作業ができます。キーディスクを持ち歩くよりは簡単です。

## 再生機能

さて、Sibelius2 は MIDI ファイルの再生機能も大変優れています。特別なコマンドを使わないでも f や pizz. accel. legato 等の記号をそのまま認識して演奏しますし、ユーザー独自の用語を辞書に追加することもできます。その種類は以下のとおりです。

- ・音符、コード、休符、臨時記号、タイ、装飾音(一部不可)
- ・音部記号、調号、拍子記号
- ・楽器名 (midi のプログラムナンバーに変換)
- ・アクセント、スタッカート、マルカート等
- ・トレモロ
- ・強弱記号や強弱を指定するテキスト
- ・メトロノーム記号
- ・再生辞書に登録されたテキスト (legato 等)
- ・反復記号 (1 番 ~ n 番括弧) coda 等は未対応
- ・ライン (スラー、トリル、8 va ライン、ペダリング、グリッサンド、ヘアピンなど)
- ・ギター記譜 (ベンドやスライド等も)
- ・パーカッション用符頭
- ・移調楽器 (正しい実音で)
- ・テキストコマンドで入力された MIDI メッセージ (非表示でなくても印刷されない)
- ・非表示のオブジェクト

これらの記号はそのまま演奏されるので作品のイメージを音で確かめるのは大変簡単です。

もっともシンプルなピアノ譜で注意が必要なのは、右手と左手が独立した譜表(チャンネル)になっているため、ペダリングはそれを書き込んだチャンネルにしか働きませんし、p や f の記号も左右別々の手に対して書き込む必要があるということです。もちろん左右の手を同じチャンネルに設定すればそれは避けられますが、寧ろこの機能を使って左右のそれぞれのパートをきめ細かく表現できるので